

# 言葉の力は 生きる力

—— 作文・綴り方を通して子ども・青年と出会う

和歌山大学

土佐いく子



筆者右端。今年8月全国作文教育研究大会を終えて。若い先生たちと

特集テーマに「綴る・書く」とある。即座に「苦手、嫌い、めんどうだ」と返ってくる。ですよね。嫌いにさせられてきたのです。

書きたくもないことを、テーマも枚数まで決められ、長くくわしくと言われ、書かされてきたのです。しかも、必死に書いたのに赤ペンで傷だらけ。あとは棚に積んで埃をかぶっていたのでは、作文なんか好きになるはずはありません。教え子の大学生いわく「先生に本当のことなんか書けませんでした。ほめられるように文章つくって、いやいや書いていました」と。みなさんはいかがでしょうか。

本稿は、現在関わっている大学生の話から始めて、かつて小学校勤務時代に出会った子どもたちの話を紹介しましょう。

## 自己表現の要求 書きたい

大学に入学して日数は経過するものの未だに話せる友人は

## 書かせないようをあせいなさく

支援学級の先生が、子どもに文を書く力をつけたいと日々指導をします。『きのう』点打って、『ぼくは』はい点打って、『おかあさん』漢字で『母』とほらこう書いて……と、先生の言葉で型にはまった文章を書かせて、これが作文指導だという話をよく耳にします。

私は、たとえ一言でも一文でも、その子の心から生まれた言葉こそ宝物だと思っています。

自閉傾向のある翔くんは、書き言葉が苦手です。ところがある日、みんなが作文を書いていると用紙を取りに来て、

泉北高速鉄道泉ヶ丘でよかった

じどうかんビッグバンでうちゅうへ行ってきました (中略)  
ビッグバンしていました

どうですか。大好きな電車に乗ってよかったよ。児童館「ビックバン」で「うちゅうへ行ってきました」と書いている今も心は宇宙にとんでいるので「行ってきます」と現在形になっているのです。しめくりの文には「ビックバンしていいました」と昨日一日の楽しい思い出がいっぱいつまった文章になっているでしょう。

子どもの言葉や文章を、書いた子の心になって共感して読みたいのです。

早く文の形にしようと書き方指導するのは禁物です。大

一人もいません。部屋に一人、孤独感、何の為に生きていくのか。これから何の為に生きていけばいいのか、マスクとソーシャルディスタンスの中で、死にたいとふと思う分です。でも、こんなこと先生に書いている自分に驚いています。少し吐き出せて楽になりました。

新型コロナ禍の大学生の心の叫びです。書かされたのではなく、聴いてほしいと思わず書いてきた文章です。この人なら本当のことが言える、吐き出せた、ほっとして楽になったと思えたら、ありたい本当の自分と向き合うのです。

大人も子どもも人間はみな、うれしいことも不安なこともさまざま抱えて日々生きています。それを誰かに聴いてもらいたい、わかってほしいと願っています。つまり、自己表現の要求をもっているのです。

切なことは、本当の自分をこの人の前では出してもいいという関係づくりが表現の土台をつくります。そして、書き手のあらゆる表現から、その人の思い、ねがいや暮らしを読みとり、共感する大人（他者）がいてこそ表現は育ち、書くことが好きになるのです。

## 表現に共感する

たっくんは入学して間もない頃、らくがき帳に「○」を4つと棒人間が立っている絵を描きました。「たっくん、これどんなお話？ 先生に聞かせて」と言うとう堰を切ったように「もうお母さんと会われへんわ。いっしょにたこ焼き買に行かれへんネン」と、離婚して家族が別れ別れになった暮らしを書かずにはいられなくて絵で表現し、語ってくれたのです。この絵から私は、たっくんの暮らしを知り、この子の生活をまるごと抱きとめての仕事が始まったのです。

まだ発語のないはるちゃん。毎朝名前を呼んでも何の反応もしてくれなくて、あせりももどかしさも抱えていた夫（支援教育に携わっていた）が、ある日大喜びで「返事してくれ」といいます。聞くと足の親指が、「はるちゃん」と言うのと、ビックッと動いたと言います。立派に返事をしてるでしょう。これも表現です。

抱いてやると身体が添ってこないさゆちゃん。お母さんは、自分も親に抱かれずにきたので、わが子を抱くのははるくさいと言います。抱いてやったかたたい身体からも、安心の懷に抱かれたたいというSOSの表現が見えるのです。